

季節が覚めて、幻想だと知らないで

いざない

あまりにも克明に視えていたから、ゆめから覚める時みたい明晰夢のグラデーションに時間が淘汰されてしまうのが嫌で、吐いた息を、あぶくを辿っている。満ち潮の流れに抗いながら掴めない光にしがみついて。

残夢、これは残夢だ。

梅雨の豪雨に光は紛れていて季節の訪れを静かに教える。澄んだ青色が街中を乱反射する頃になると、私は自分に近づける。あの季節にしか入れないシャボン玉からは淡い色の世界が視えて、好きなもの、好きな記憶だけが柔らかく渦巻いているから酔ってしまう。長い思い出が濃縮された果汁の温泉になって、私は深く深く浸っている。そんな時に現れるあまいめまいは蕩けた脳への追い討ちの催眠術で、歪んだ空気に心地良ささえ覚えながらゆっくりと落ちていく。暗闇の底で見る白昼夢のきらきらが眩しい。昇っているのか墜ちているのかもわからない、そんな不安定が癖づいてしまったから、視界が溺れてしあわせが滲んでいても、もう一つの美しさが視える私は、真髄に近い偶像に見惚れて逢いにいこうとする。

そこでシャボン玉の薄い膜は音もせずに弾けて私は覚めてしまう。微かに残った数粒も間もなくして全て溶けていく。こうしてまた今年も季節が過ぎ去っていく。着実に。これは夏のマジックなんて言葉に収まらないくらいの魅惑の感覚。誰もがこれを感じることは出来ないけれど、光は確かにあって、レンズを何重越しにしても同じ解像度で視える季節、あれは私の季節だ。もう今は藻掻いても届かない。だからどうか、季節が覚めて幻想だと知らないで。